

1. はじめに

「森林飽和」(太田, 2012)の出版など多くの啓発活動の努力により、かつて森林は現在よりも疲弊し荒廃地が広く存在していたという認識が一般市民にも定着しつつある。ただし荒廃地といっても草木一本生えない砂漠のような状態もあれば、有用樹がなく藪漕ぎも困難なブッシュのような状況もあろう。砂防学の観点からは前者と後者は土砂生産の有無という決定的な違いとして捉えられる。しかしかつてどのような荒廃がどこでどの程度進行していたのかという実態についての情報は非常に限られている。遠景写真では判読が困難であり、絵画では空気遠近法などの技法が施される。

明治期に東京大学(農科大学時代を含む)の林学実科や本科の学生が各地を修学旅行で訪れており、その一部については、大日本山林会報に旅行記が掲載されている。この記録は、次の理由により当時の森林や林業の実態を伝える信頼性の高い情報といえよう。

- a) 専門知識を有する学生が本多清六や諸戸北郎やアメリカ・ホフマンらの教員の引率指導のもと、各地の専門家(林業家や公務員など)の案内で山間地を歩き調査を実施するなかで見聞した現地の実態である。
- b) 大日本山林会報は、林業の改良・進歩を目的とし明治15年(1882年)設立され、著名な林業家が名を連ねている林業団体である。その会報は、林業家や公務員、林学研究者らが投稿者および読者として関わっており、森林・林業の多くの論文や報告が掲載されてきた。修学旅行日誌の多くは連載記事として掲載されており、多くの読者の目に晒されてきている。
- c) 修学旅行記が大日本山林会報に投稿された目的については、明治39年の旅行日誌の最後の段落(7月22日分)の記載に「この不備なる日誌が、少しでも沿道の地を紹介するの助となったならば、この上ない幸いである。」とあることから、沿道の地を読者に紹介する役割も意図されていたと考えられる。

この明治39年の旅行記の愛知県内について田中(2018)の既報があり以下の3点を指摘している。

- ・矢作川乙川合流点付近(現在の豊田市南西部)では赤裸の山が存在し砂防工事が施されており、瀬戸付近では植生がまったくない状況と描かれている。
- ・前項以外には山地荒廃地の記述はないが、豊根～稲橋間の津具や足助東の加茂では広大な草地が存在。
- ・現代よりも森林資源への依存度が高かった当時においても、間伐材や雑木の利用は採算をとるのが簡単ではなく、採算の改善のために林道開設に投資した段戸山の事例をその建設費と維持費とともに紹介。

2. 研究方法

本報告では、大日本山林会報に旅行記が掲載された修学旅行のうち諸戸北郎が引率したものを対象とした。

管見では、1)明治34年夏季林学実科の修学旅行、2)明治36年の林学本科実科の第二学年級の春季修学旅行、3)明治37年林学科夏期修学旅行、4)明治38年林学実科三年生級修学旅行、5)明治39年の林学実科3年生の修学旅行、6)明治43年の奥国(オーストリア)と瑞西(スイス)の夏期修学旅行が挙げられる。1)～5)を読み解き、明治期の山地荒廃状況を考察した。

3. 結果

3.1. 明治34年夏季林学実科の修学旅行

明治34年夏季林学実科の修学旅行(大日本山林会報第227号)は諸戸助教授の指導で8月19日から9月4日まで名古屋、多治見、中津川、王滝、付知、大津、京都、比叡山と巡っている。8月19日に東京を出発し20日に名古屋集合、21日に白鳥の貯木場と熱田神宮、その後、岐阜県多治見へ移動。陶器業の煙突からの黒煙を見、陶器業と森林との関係を考察している。「多治見地方より釜戸中津川に至る一帯の山野土地の荒廃するもの甚だしく赤裸に非ざれば雑草または赤松の幡屈たるのみにして殆んど其の生長を停止せるものの如し」と記している。

3.2. 明治36年林学本科実科の春季修学旅行

明治36年の林学本科実科の第二学年級の春季修学旅行(大日本山林会報第252号)は、3月18日～4月13日の日程で右田と諸戸の二助教授、本多教授の指導の下、天城山、瀬尻御料林金原明善植林、名古屋、彦根、京都台杉、大阪博覧会、岡山、吉野を巡っている。

植生について、「(中略)天城山に向ふた。仰ぎ見れば、天城山の山毛櫨(注：ブナ)や、天城山の松は鬱然として山を囲み、森々とした薄影が、幽かに雲中に表れている。」や「三方原は御料局の所轄に係る一面の松林で最も松毛虫被害を以て有名な処である。去る二十四年の頃壊は原の西方一里許りの地に発生し其勢中々侮るばかりたるものであった。然し爾後三四年にして殆ど其跡を失ふたと云ふ、次で三十一年に再び前より西方二百五十町(以下略)」の記述がある。

名古屋では白鳥貯木場を見学しているが、近郊(例えば瀬戸市)のはげ山地域については旅程にもなく言及もない。

滋賀県犬上郡大瀧村の八尾国有林は以下のように描写されている。「高所にありては林齢百七八十年生の扁柏(注：ヒノキ)林にして、中腹は扁柏及赤松の混淆林鬱蒼とし中腹以下にありては扁柏を混することあるも林齢三十乃至八十年生の赤松単純林なりとす。此等扁柏は凡て天然生にして老樹の下稚樹能く發育しつつあるを見れば天然更新作業の適切なるや疑なし。溪間には天然又は植栽の杉樹ありと雖も極めて僅少なり。小憩後山腹を伝ひて歩道を上り山頂に到り隣接地宇一の瀬山の砂防工事の実況を視る。砂防工事とは既に吾

人の知れる如く古来濫伐戦火等の結果林地荒廃山骨露出し地力衰退の結果已に（注：すでに）通常の方法にては造林能はざるを以て先づ土砂の崩壊土壌の流出を防止し此方を恢復せんが為に施す工事にして其方法にも種々ありと雖も要するに可成速かに林地を鬱閉し林地をして適當の方法を為さしむるにあり。」以下、ヒメヤシャブシと山腹工の説明が続く。「(工事の費用は)通常造林費の十倍以上に及ぶものにして当所の如きは芝代一間に付工事共に二十四銭の請負工事にして一町歩の工事实に五百円に及ぶと云ふ。若し夫れ世人にして愛林の志を有し能く之を撫育し来りしならんには此れ贅費を出すことなく反対に年々数十円の収穫を得べかりしを山林の撫育豈徒閑に附す可けんや」とある。

一行はその後京都に移動し北山や嵐山を訪れ、以下のように記している。「(略)嵐山に出づ。春尚ほ早しと雖ども渡月橋の畔二三株の綻び初め山川の光影の幽雅なる所墨堤の春色の及ぶ処にあらず花より団子の桜見逃すも残念なれば心おきなく片付け清涼の智福院、天龍寺等の古刹を訪ひ（以下略）」。

しかし、山林の荒廃についての記載はない。

ところで、司馬遼太郎（1978）によれば明治維新後、大久保利通は「嵐山が荒れているので資金提供を」という陳情を受ける。明治10年代後半から保勝会などによる嵐山の植林が活発化し、明治16年には岩倉具視、井上馨、香川敬三、北垣国道らが嵐山桜楓会を結成し資金を集めて嵐山の整備を実施したという（大阪営林局、1933）。明治28年には京都府議会が嵐山、東山等の名勝地の風致林保護の建議を採択するが嵐山の荒廃は解決せず、昭和5年の風致地区指定に至ることとなる（田中、2008）。明治36年の林学本科実科の春季修学旅行は、まさにこの嵐山の保全問題の渦中に実施されているが、旅行記からはそれは伺われない。その理由は不明であるが、関係者を呼んで説明を受けるというような引率教員による設定はなかったようである。

3.3. 明治37年林学科夏期修学旅行

明治37年林学科夏期修学旅行（大日本山林会報第273～281号）は、アメリカ・ホーフマンと諸戸北郎の指導で学生13人が参加している。7月11日に群馬県高崎市を出発し軽井沢に向かい浅間山山麓の落葉松造林地を見学、長野、松本、塩尻と移動し木曽福島西筑摩郡立木曽山林学校を訪問、同校の演習林を視察後、御岳登山、王滝を経て小川伐木地を見学、上松から阿寺、木曽路の野尻から妻籠を経て中津川に向かっている。ここでは「数日前の大雨にて河水氾濫し山腹崩壊し橋梁悉く破損し」、家屋や人的な被害が記されている。「山腹の崩壊は特に花崗岩の地層に多く又芝生により覆はれたる山腹に著しきも森林には比較的少し。」と記している。その後、愛知県の瀬戸市で砂防工事を視察、「赤裸々たる花崗岩の丘陵面積約五千町歩に亘り其内五百町歩は已に砂防工事を施せり、由来愛知県は比較的山林少なく面積三万町歩にして其内二万五千町歩は御料局に属し其余は共有林なりとす而して瀬戸亦御料に属するも砂防工事は県庁土木課によりて行はれつつあり（中略）、瀬戸砂防工に於いて特徴とするは鉄線の蛇腹及陶器の堰堤なり」と記している。

3.4. 明治38年林学実科三年生級修学旅行

明治38年林学実科三年生級修学旅行（大日本山林会報第282～289号）は諸戸北郎とアメリカ・ホーフマンの指導で同年7月9日～29日の日程で名古屋、瀬戸（砂防工）、中津川、野尻、多治見、大垣、桑名山田、吉野口、奈良を回っている。名古屋で製材所を見た後、翌日、自動鉄道で瀬戸に向かうが「途すがら眼を窓外に放てば、赤裸々たる禿山の此処彼処（ここかしこ）に散在せるを見、遂には一帯の山派皆血を以て塗りたらん様の惨状を呈するに至る、これ実に余等の想像以外なりし」と記している。次の記述もある。「愛知県に於いては二万町歩に渉りて、砂防工事を施す必要あり。同工事設計を農科大学に委託し、ホーフマン先生之が担任となり、去三月二十二日諸戸助教授及学生二名を引連れて此処に出張し此地方の砂防工事設計をなしたるなりと。同学生の卒業論文は実に之に関する記事なり。」翌日は瀬戸からその北方の高蔵寺に向かうが、「砂防工を視る。此日過ぐる所は多く工事に未だ着手せざる部分なるを以て、地骨裸出の惨状到底昨日の比にあらざるを覚ゆ」と記している。木曽路の旧宿場町野尻で木曽川と合流する阿寺川では以下のように記している。「此の附近水清く草緑にして風景佳なり、愈々（いよいよ）入りて愈々美、仰げば名にし負ふ木曽の五木は鬱蒼として満山を蔽ひて一点の禿地を現はさず、黄鳥囀り蟬樹間に喧（かまびす）しく、人をして真に幽邃なる深山に分け入るの感あらしむ」。その後、錦織綱場を経て岐阜市に入る。桑名では用水水源地を見学、伊勢に至りて内宮、神苑農業館、外宮に寄り、吉野林業を視察後、奈良で解散している。

3.5. 明治39年の林学実科3年生の修学旅行

1906年（明治39年）6～7月に諸戸北郎の指導で実施された東京大学林学実科3年生の修学旅行（大日本山林会報第291～296号）では、豊橋駅に到着後、新城から奥三河を巡り、岡崎、名古屋、瀬戸、高蔵寺、以降岐阜県内の中津川、付知、下呂、大洞、金山、下麻生、笠松をめぐり、7月23日に岐阜に到着している。この間、修学旅行参加学生は測量をしたり、植生調査をしたり、林業の現場を見学している。愛知県内については田中（2018）の既報がありその要旨は前述した。

岐阜県部分の旅行は暴風雨であったが強行され、豪雨下を徒歩で移動している。中津川市においては激流となった木曽川本流を樹根や切株がしきりに漂流しそれを住民が取り上げて居る様が描かれている。付知から下呂に向かうまでは山地荒廃の描写はない。下呂から少し北の東上田村椋ヶ洞で砂防工事を視察している。ここは昔の濫伐で荒廃し、明治18年に内務省の事業として起工し、石積工や張石工がの施工が継続されていたとある。その後、大ヶ洞を見学し下呂から飛騨金山を経て岐阜市に至るが、特に山地荒廃の記述はない。

引用文献

- 田中隆文（2018）明治期の東大林学実科の修学旅行にみる当時の愛知の山地荒廃状況。中部森林研究66号。
- 田中隆文（2008）環境問題はイメージでは解決しない。—ステレオタイプに惑わされないための水士保全学講義ノート—。星雲社、pp.125